「 撫川団扇の鑑賞とオリジナル団扇の制作 」
ー地域の伝統工芸の魅力を生かしてー（前編）

岡山大学教育学部附属中学校
教諭　辻　政宏

Ⅰ 授業化までの流れ

１　「伝統工芸」を授業に

岡山県には、各家庭に一つはあるであろうたいへん身近な伝統工芸品「備前焼」がある。備前焼は、これまでも何度か選択授業や必修授業で扱ってきた。生徒たちは、制作の様子（ビデオや作家さんに来て頂いて）を鑑賞したり、自分がつくり使用してみたりすることで初めてよさや味わいが理解できるようになっていった。こうした体験を通して、生徒にとって備前焼が生活の中で息づく伝統工芸品となっていくものと思われる。（図１～３）しかしながら、こうした焼物の授業は、その学校の設備によって左右される。現任校には電気釜（コップサイズであれば２００個ぐらいは余裕）があるので気軽に取り組んでいるが、前任校には窯がなかったので、作家さんにお願いして焼いていただいていた（必修授業では難しく選択授業で）。これから先、勤務校が変わっても実施可能な授業を考えていたが、地元も含め日本の伝統工芸に関する授業は鑑賞止まりになっているのが現状であった。

図１　作家さんの制作の様子を観察

図２　制作の様子

図３　完成作品

２　新たな授業を模索して

生徒にとって「伝統工芸」は、「渋くて高価で高度な技術を要する芸術。自分とはあまり縁のないもの」といったイメージがつきまとうようだ。生徒たちに「岡山の伝統工芸で知っているものは？」と聞いてみたところ出てくるのは備前焼止まりであった。もちろん、岡山にも備前焼以外に優れた伝統工芸品がある。生徒の持っている美術資料には竹細工や団扇などの作品がわずかながらであるが紹介されている。備前焼の授業をしながら、地元の他の伝統工芸品についても鑑賞や表現を通して、先人の知恵に触れ「和」のよさや美を味わい楽しみ、伝統工芸に対する捉え方を豊かにするような授業はできないかと思案していた。書籍をあたることはもちろんだが、テレビ番組、伝統工芸展の鑑賞、デパートで催される職人さんの実演（展示販売会で）などからヒントを得ようとそれなりに努力はしていたつもりである。

３　「撫川団扇」との出会い　（図４～６）

そんな折、偶然地元のテレビニュースで、前記した団扇の製法を後生に伝える保存会のことが報じられていた。それは「撫川（なつかわ）団扇」註：　という一見パットしない地味な感じの団扇なのだが、なんと光にかざすとそこに施されていた絵柄が鮮明になり、更に絵柄にちなんだ俳句が浮かび上がるというトリックが仕組まれているのだった。しかも、このような素敵な工夫をこらした製法が今から３５０年も前に確立されていたことに大変驚いた。実はこの団扇、以前から近くにある県の観光物産センターで実物を頻繁に目にしていたが、その見た目と１万円という価格から、全く興味を持つことができなかった。たいへん恥ずかしく思った。

光にかざすと→

図４　撫川団扇

「すっと来て」

「袖に入りたる」

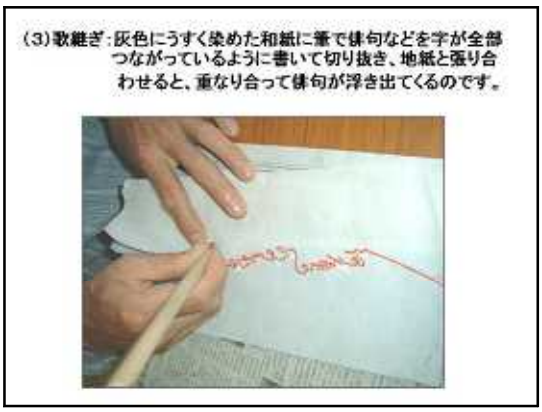
「蛍かな」

図５　部分拡大

図６　観光物産センターと撫川団扇の展示

４　「撫川団扇」の取材に　（図７）

早速、保存会の代表の方に連絡を取ったところ、現在、市内の公民館で毎週講習会を行われているということで取材に出かけた。公民館を訪れると 10 数名の方が、黙々と製作に励まれていた。製法は、「骨作り」にはじまり、「紙作り（すかし、歌継ぎ）」「紙貼り」「仕上げ」と行程を踏む。たまたま初心者の方がおられその方に付き添って、「骨作り」の様子から見せていただくことができた。その後、「紙作り」「紙貼り」「仕上げ」の様子も拝見したが、想像を遙かに超えたその高度で繊細な技に唖然とした。



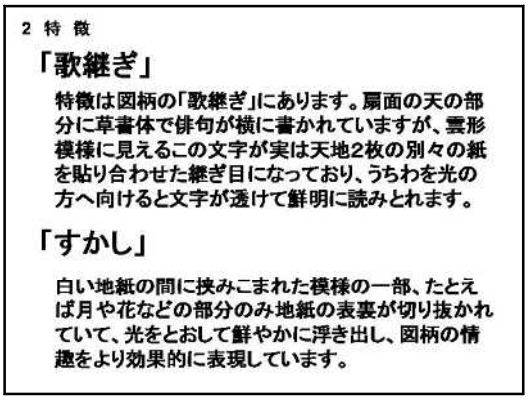


図７　撫川団扇の制作過程

５　「撫川団扇」の魅力を生かして

取材を終えてから、この「撫川団扇」の魅力を生かした授業化に取り組んだ。そのままの製法を持ち込むことは、生徒の技量を考えると困難であると感じた。特に「骨づくり」は技術的（特に工具類の準備）、時間的に到底無理である。そこで「撫川団扇」の魅力である和紙の透光性を生かした制作に絞ることにした。和紙は身近な素材でありながら普段あまりそのよさや美しさを意識せずに触れており、生徒たちにとってある意味新鮮な素材である。「撫川団扇」の鑑賞を通して岡山の伝統工芸の魅力や特徴を感じ取らせながら、地元の伝統文化への興味関心を高めると共に、これまでの学習で身につけてきた形や色のはたらきや技法を創意工夫しながら表現を追究できる授業がつくれると考えた。

６　テーマをどうするか

テーマについて、はじめは撫川団扇に習って俳句を詠ませそのイメージを絵柄にと考えたが、ちょうど３年生の授業で「自分を見つめること」をテーマにした授業を構想していたこともあり、このテーマのもとで「オリジナル団扇」を制作することを思いついた。ここでは、「撫川団扇」の最大の特徴である「歌継ぎ」と呼ばれる部分に相当するものを「わたしの大切にしたいコトバ」をモチーフとした切り絵技法による表現で、更に絵柄に相当する部分は、和紙にあった着色技法などを中心に「わたしの愛する曲（シラベ）」をモチーフに表現させていくことにした。「コトバ」を「シラベ」でサンドイッチのように両面から挟み、光にかざしたとき「コトバ」と「シラベ」が一体となって浮かびあがるようにした。

Ⅱ 指導目標　（図８）

この題材は絵、デザイン及び工芸分野と鑑賞による複合題材とし、 指導目標の設定にあたっては、新学習指導要領に示された内容に照らし合わせ作成した。

この授業のゴールは、私自身が体験した「岡山の伝統工芸の新たな美や価値に気づく」ことである。そのために、指導上の留意点として、特に導入段階での鑑賞において、生徒自身が気づきながら関心や意欲を高められるよう工夫したいと考えた。また、制作においては、これまでの学びを活用し、新たな自分なりの表現方法を創意工夫しながら追究できるものになるよう留意した。

関心 意欲 態度	A 表現						B 鑑賞	
	(1) 絵や彫刻に関する発想構想		(2) デザインや工芸に関する発想構想		(3) 創造的技能			
地域の伝統文化によさや美しさ、先人の工夫などに関心を持ち、日常生活の中で生かすことの喜びや価値を味わう。	ア 主題の創出	イ主題を基にした表現の構想	ア構成・装飾を考えた発想構想	ウ用途や機能を考えた発想構想	ア創意工夫して表現する技能	イ見通しをもって表現する技能	アよさや美しさなどに関する鑑賞	ウ美術文化に関する鑑賞
	自分を多角的な視点で捉えながらテーマを豊かに発想する。	テーマについて形や色彩、構成を意識しながら構想を練る。	団扇の形状を生かした画面構成を考える。	和紙の特性を生かした構想を練る。	構想に基づいて、技法や材料を工夫しながら表現を追究する。	構想に基づいて、計画的によりよい表現を追究する。	自他の作品を形や色彩の特徴などを基に鑑賞をすることができ、自分なりの美的価値意識を自覚する。	岡山を代表する伝統工芸の価値を感じ取りながら日本の美術文化への理解を深める。
共通事項	ア 形や色彩，材料，光 などの性質やそれらがもたらす感情を理解すること。 イ 形や色彩の特徴などを基に，対象のイメージをとらえること。							

図８　指導目標

III　指導計画　（図９）

計画は全１２時間とし、夏季休業の課題として切り絵部分の下絵制作を課した。

IV　授業の流れ

１　「撫川団扇」の鑑賞　（図10～12）

いきなり団扇を見せるのではなく、取材で撮影した「骨づくり」の製作行程をスライドで順に映しだしながら、何をつくっているか予想させた。団扇であることがわかったところで、実物を登場させ、実際に手にとらせ班ごとに見せた。次にこの団扇の価格について予想させた。見かけの印象とのギャップを感じさせることがねらいである。

ここで、いよいよこの団扇の魅力に誘っていく。団扇の鑑賞の仕方を明かし、光にかざす前と後の印象の違いを実感させた。続いて、全ての団扇に三つの大きな波模様があることに着目させる。更に、この部分をスライドで拡大し、そこに文字らしきものが描かれていることに気づかせる。そして、先ほどの「３つの波」をヒントにして俳句が書かれていることに気づかせる。この部分は、俳句がたいへん達筆な一筆書きで（変体仮名もある）書かれており、なかなか読むことは難しい。しかし、よく見ると中学生でも何とか読みとれる文字もあり、そこを手がかりに読ませていく。そして、その下に色紙や「透かし」で施された文様がその俳句の内容と関係していることに気づかせていく。最後に「撫川団扇」の製法や歴史的背景などの解説を加えた。

時	学習内容	主な指導上の留意点	評価の視点
1	1「播川団扇」の鑑賞 制作行程や実物を鑑賞しながら、「播川団扇」の特徴を理解し、よさや美しさを感じ取る。 ※図３～５参照	○ 「骨作り」の行程をスライドで徐々に見せながら、何をつくっているところか予想させたり実物を鑑賞させ「歌舞き」のトリックに気づかせたりしながら、興味関心を高める。	Ⅰ伝統工芸品に対する興味関心を持てたか。 Ⅳ「播川団扇」よさや美しさを感じ取ることができたか。
1	2　発想 自分の大切にしたい「コトバ」や自分が愛する「曲（ＢＧＭ）」のイメージを広げる。 ※図６の２参照	○ 自分が選んだモチーフのイメージをウェビングに よって広げさせ、その中から自分の表したいイメー ジを絞り込ませる。更に決定したテーマについて、なぜそれを選んだのか根拠を明らかにさせ宣言文を書かせお互いのテーマを閲覧できるように掲示し、創作意欲を刺激していく。	Ⅱ自分の選んだモチーフのイメージを豊かに広げながら自分のテーマを創出することができたか。
3	3　構想① 形や色彩の構想を練る。 ※図６の３参照	○ テーマを形や色彩、構成として何を扱うか「造形言語変換カード」によって整理させる。	Ⅱテーマを形や色彩としてのイメージを整理できたか。
	4　構想② アイディアスケッチを重ね構想を練る。 ※図６の４参照	○ 構想１で確かめた形や色彩をもとに団扇の形状をした用紙を準備しておき、必要なだけ使用すればよいことを奨励する。	Ⅱアイディアスケッチによりテーマに基づいて豊かに構想を練ることができたか。
夏休み	5　制作① 下絵を制作する。	○ 下絵制作にあたって切り絵の条件として以下のことについて事前指導しておく。 ・線の太さ２ミリ以下にしないこと（紙の耐久性を考慮して）。 ・各部分をつなげること。 ・アウトラインを明確にしておくこと。	Ⅲ切り絵の条件を踏まえた下絵を完成することができたか。
4	6　制作② 切り絵を制作する。 ※図６の５参照	○ 班内で互いの下絵が切り絵の条件を満たしたものになっているかチェックさせ、その上で指導者が最終確認する。 ○ カッターナイフの扱い方について以下のことを図を用いて説明する。 ・怪我をしない、させない。 ・刃の向き角度、刃の切れ味を確認すること。 ・角の処理を丁寧にすること。	Ⅲカッターナイフの扱い方を理解し、切れ味などを十分意識しながら制作に取り組めことができたか。
	7　制作③ ＢＧＭを制作する。 ※図６の７参照	○和紙の特性を生かすための絵の具の濃さについて１年次に学習した「重色」の効果を参考にすること伝える。 ○その他の表現技法についてサンプルを常に閲覧できるように掲示しておきそのために必要な用具など自由に使えるように準備しおく。	Ⅲ構想に基づいて和紙の特性を生かしこれまで身につけてきた表現技法を駆使しながら表現を追究できたか。
2	8　制作④ 貼り合わせ 乾燥 仕上げ	○切り絵（コトバ）とＢＧＭを仮重ねして、表現の効果を確かめさせる。 ○しっかり乾燥させたものから仕上げ（切断）に入ることを伝える。	Ⅲ貼り合わせの工程を理解し丁寧に作業することができたか。
1	9 相互鑑賞	○キャプションとあわせて作品を相互鑑賞し、工夫やよさ美しさなど感じ取ったことをメッセージとして伝えあう。	Ⅳ互いの作品のよさや美しさなど感じ取ることができたか。

図９　指導計画

指導者の発問指示など	生徒の反応
「骨作り」の様子をスライドで見せながら、何をつくっているか予想させるところから始めた。	
スライド１ スライド ５ スライド８ スライド22 スライド 30 スライド 31	
「何をつくっているでしょう？」 更に、スライドを進めていく。 ３１枚目にしてようやく・・・	「ほうき」「茶道で使うやつ」 沈黙 「うちわ！」
「この団扇の骨は直径２㎝ほどの女竹を小割りにしながら最終的には６４本にまで増やすんだよ」	感心の声
ここで、完成品である実物を班ごとに順番に回覧させて見せる。 「このうちわ見たことある？」 「このうちわ欲しい人？」 「いくらなら買う？」	ちょっとだけ見て次の班に回す。 あまり関心のない様子。 反応なし １０数人の手がちらほら 「100円」「500円」「980 円」 「3000円！」 「エーッ」
「もっと出してもいいという人は？」 「実はこれ１万円するんです」	反応なし 「エーッ」皆、驚愕の声
「さっき見たことないって言ってたけど、みんな一度は目にしてる人が必ずいるよ。」	「あっ、資料集に載ってた」 その声を聞いて、ごそごそと資料集を取り出しそのページを探しはじめる。 「何で一万円もするんかなぁ」

図10　撫川団扇の鑑賞授業の様子

指導者の発問指示など	生徒の反応
「実はこの団扇にはあるトリックがあるんです。」 ここで更にスライドに注目させる。 「気づいた人いるかな」 「このうちわこうやって見るんです。」 光のかざして見ることを伝える。 	反応なし 「わー」と驚きの声 ちょうど実物を見ていた班が、 すかさず電灯に照らして眺め、 「絵がはっきりした！」 「きれいじゃなー」
「でも、これだけじゃないんだよ。この団扇の上の方に注目してごらん、波模様みたいなのがあるよね。資料集に載っている団扇にもあるよね。これって何かなあ？」 「じゃあ、この部分を拡大するからね」　再びスライドへ 拡大してもわからない様子なので、 「実はここにこの団扇の最大のトリックが隠されているんだよ」 「この部分、このままじゃあわからないんです。こうやって縦向きにして見るとわかるんだよ」 スライドで、この部分を縦向きにし更に拡大。 「どの団扇も波が大きく３つに分かれているよね。これが大ヒント。」 「そう！実はここに文字が書いてあるんです。」 「さっき３つに分かれているって言ったよね。」 「そうです。ここには俳句が詠まれているんです！」	また沈黙 皆一様に、頭を傾けて見るが、さっぱりわからないという様子 「何か書いてある！」 「わーほんとじゃあ」 「何が書いてあるかわからんな」 「俳句？」 「すごい！」

図11　撫川団扇の鑑賞授業の様子

指導者の発問指示など	生徒の反応
「最初の波のところよーく見て。どんな文字が見えるかな」 「次は？」 ここで正解を伝える。 「すっと来て・・・」「袖に入りたる・・・」「蛍かな」 「ここにある俳句の内容と、下にある絵柄の内容が一致しているんだね。」	「す？」 「つ」「と」 少しずつ字が見えてきた生徒 しかし、ここ止まり 「ほんとじゃあ」 皆、納得の表情。
「この団扇、岡山の伝統工芸なんです。撫川団扇と言います。この団扇は今から３５０年も前につくられていたんです。岡山の西に庭瀬ってところがあるよね・・・」 以下のスライドを示しながら、この団扇の製法やルーツなどについて話をした。	真剣な面持ちでメモをとりながら話を聞いている。

「今回、皆さんにもこの団扇の制作にチャレンジしてもらおう思います。でも、これをそのままつくるのは大変なので、この撫川団扇の特徴を生かしたオジナル団扇を制作していきましょう。」
「今回のテーマは『 わたしの大切にしたいコトバ 』『 わたしの愛する音楽 』 です。次の時間までにしっかりとモチーフを集めておいてください。」

図12　撫川団扇の鑑賞授業の様子

註：撫川団扇のルーツは三河藩（現在の名古屋）で、元禄12年（1699年）、板倉重高（上総国高滝藩、現在の千葉県）が庭瀬藩（現在の岡山市）に国替えになった頃に、隣りの撫川藩と共に両藩の士族の間において内職として盛んに製作され、その後庭瀬藩方は次第に衰えたが、一方撫川藩では、商人の間にも製造者が続出するようになった。その後「撫川団扇」として、当時中国・四国・九州各藩の諸侯に参勤交代の途次、江戸や国元への土産品として珍重がられ、天下にその名を広めた。（図13）

江戸時代以降、文化が進み機械工業の発達につれて、実用的で価格の安いうちわが大量に出まわるようになり、撫川団扇のような熟練と手数がかかり高価なものは、自然淘汰され衰退の一途をたどって来た。

戦後、電気製品の発達により、団扇の需要も少なくなり一時は途絶えていたが、坂野定香氏が中心になって、撫川うちわを復活させた。 また、後継者育成と、撫川団扇を広く知ってもらうことを目的に、吉備公民館（岡山市庭瀬）において、昭和５５年１１月より撫川うちわ製作実習講座を開き、この受講生の中から保存会結成の話が持ち上がり、坂野氏を会長として、昭和６０年２月、撫川うちわ保存会「三杉堂」が結成された。 昭和５７年３月には、岡山県伝統的工芸品として指定された。

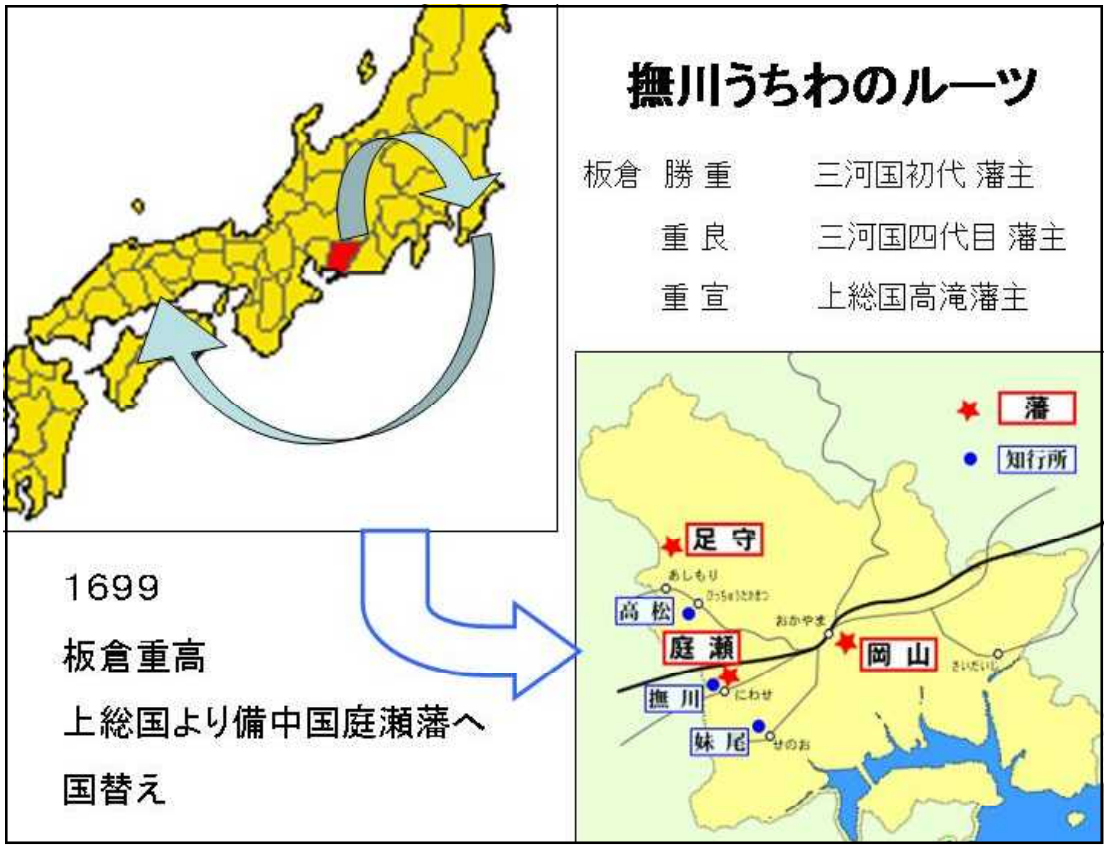


図13　撫川団扇のルーツ

「 撫川団扇の鑑賞とオリジナル団扇の制作 」
ー地域の伝統工芸の魅力を生かしてー（後編）

岡山大学教育学部附属中学校
教諭　辻　政宏

Ⅳ　授業の流れ

２　発想構想

①　テーマの創出　（図１）

「撫川団扇」の最大の特徴である「歌継ぎ」と呼ばれる部分に相当するものを「わたしの大切にしたいコトバ」として、更に絵柄に相当する部分を「私の愛する音楽（シラベ）」としてモチーフにすることを伝え選ばしておいた。更に、なぜその「コトバ」「シラベ」を選んだのか、その理由を明確にすることと、そこから感じ取れるイメージを言葉などで思いつくままに広げさせた。そこからテーマを絞り込ませところで、自分が選んだ「コトバ」「シラベ」のイメージや選んだ理由について記述したもの（宣誓文）をパネルに張り出し、お互いのテーマを鑑賞し合った。生徒の中には、友達から刺激を受けてもう一度テーマを考え直す姿も見られた。

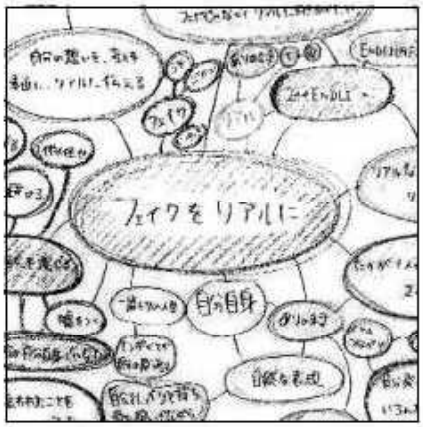
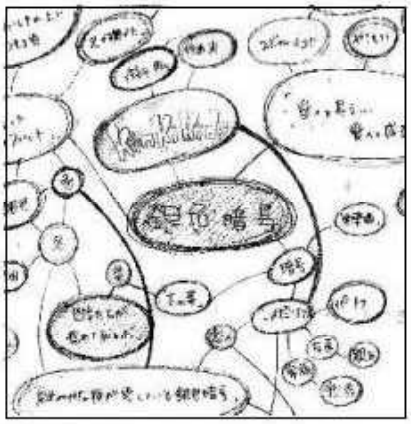
	コトバ	シラベ
①主題発想	 「 フェイクをリアルに 」 フェイクの自分を演じたり、嘘で自分を創りあげずに素直に、リアルに自分の思いを伝えたりありのままの自分を表現することが大切だと言うことがこの一言の中に込められているので選びました。	 「 銀 色 暗 号 」 すごい切ないメロディにもかかわらず奥の深いリリック（詞）や単語の一つ一つがストレートに耳に入ってくるのでとても聴きやすく「暗号」とか「咲き誇る笑顔」等のきれいな表現が心に響く曲だと思ったから選びました。

図１　テーマの創出

②　構想１　（図２）

アイディアスケッチに入る前に、「コトバ」「シラベ」そのイメージをどのような形や色彩としてとらえればよいか、「造形言語変換カード」というワークシートを活用して確かめさせた。これまで学んできた色彩や形、材質感、構成美などを意識させながら、自分の表したいイメージの手がかりを得させることをねらいとしている。

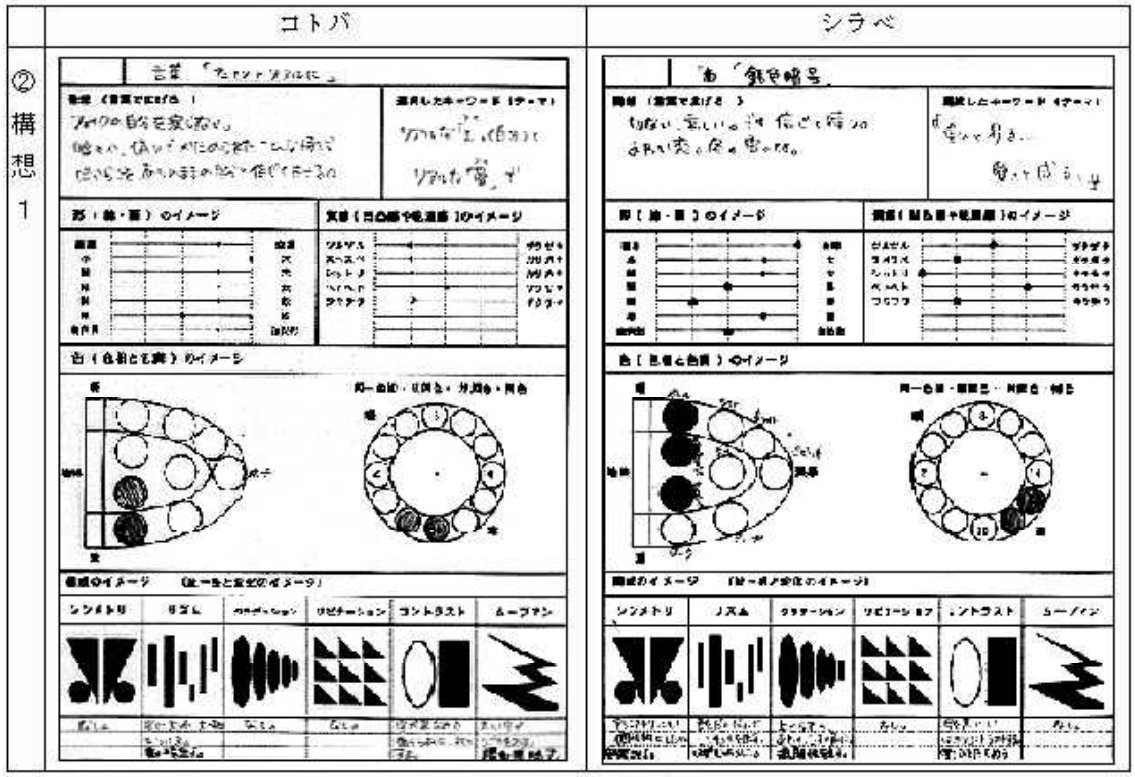


図２　構想１「造形言語変換カード」

③　構想２（アイディアスケッチ）　（図３）

整理した形や色彩のイメージを手がかりにアイディアスケッチに入る。あらかじめ、団扇の形状を印刷した用紙（実物の四分の一の大きさ）を準備しておき、必要な数だけ使用すればよいことを伝えた。生徒には、日頃からアイディアスケッチを行う際のコツとして次のようなことを意識させている。

・質は量の中から生まれる。失敗作だと思っても消さない捨てない。

・色や形だけで示すのではなくどんな感じにしたいのか、どんな方法をとろうとしているのか示すこと。

・第三者にもわかるようにすること。

このアイディアスケッチの段階で

生徒は、正確に読める丁寧な字体（いわゆる楷書行書や基本的なレタリングの書体）に固執している様子がかなり見られた。一方で字を書くことに苦手意識を持っている生徒は、一行に進まない状況があった。そこで生徒には、思い切って模様化するつもりで自分のイメージを形や線にするようアドバイスを加えた。すると実に多様な表現が出てくるようになり、アイディスケッチの数が急に増していった。中にはほとんど本人でしか読めないようなものも出てきたが、そこにはその生徒の選んだ「コトバ」に対するイメージが形や構成として工夫されていたので多いに奨励した。

図３　　構想２（アイディアスケッチ）

３　制作

①　下絵づくり

まず、「コトバ」部の下絵づくり（実物大）から始めた。この部分は切り絵技法によって表現するため、その条件として、全てのラインが明確であること、全ての部分がどこかと陸続きになっていることを押さえた。ちょうどこの下絵を描き始める頃に夏休みに入るため、休み明けの授業までに下絵を仕上げてくることを課題とした。

休み明けの最初の授業では、互いの下絵を前記の条件を満たしたものになっているか、また、表そうとするイメージが伝わるよう工夫されているかについて班内で互いに確認させた。班のメンバー全員の確認が出来たところで、指導者が最終点検を行った。

②　切り絵制作　（図４）

下絵を黒の上質紙（一部白の和紙を使用する者もいる）にスプレーボンドで仮貼りする。細かい部分が多いのでデザインナイフを使用させた。使用に当たっては安全性と切れ味を強調しておく。特に替え刃は多めに用意しておき、常に刃先の状態を確認するよう指示した。この切り絵制作では、美術教室が 40 名の気配を感じられないほどの静寂に包まれていた。切り絵の授業はこれまでもいろいろな形で題材に取り入れてきたが、何度やっても生徒たちの真剣な姿を見ることができる。切り絵の魅力はゴールがはっきりしていることと、白と黒のコントラストで浮かび上がる図と地の美しさである。進度調整のために、早くできた生徒には、オプショナルとして栞制作（最後はラミネート仕上げ）をさせたが、これが意外と好評で何枚もつくりたがった。

③　紙面制作　（図５）

Ｂ５サイズ程度の紙面用の和紙を与え、構想に従って制作を進めていく。着彩の際の注意点としては、絵の具（主にアクリル絵の具）の濃さを調節することである。生徒にはパレットで薄めた絵の具を必ず新聞紙に試し塗りをさせ、活字が透けて見える程度の濃さになっているか確かめさせた。表現方法としては、これまで学習してきた基本的な水彩技法（重色、にじみ、ぼかし、ドライブラシなど）やモダンテクニックの他に、糸やローラー

などの使用方法、透かしや貼り絵などの技法も紹介し、生徒が表現意図に応じて創意工夫できるようにした。紙面は、最低２枚（表用と裏用）必要であるがデザインによっては片面が白紙のままでもよいことを伝えた。

紙面ができあがると早速生徒は、窓ガラスに切り絵部分と紙面を重ね合わせ光にかざし出来映えを確認し、満足できないところはやり直しをしていた。

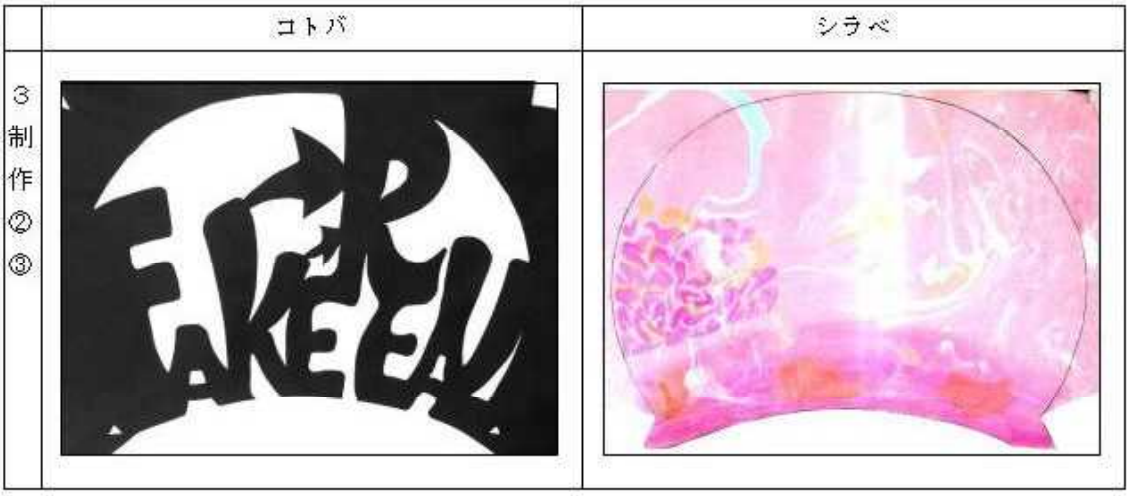


図４　切り絵制作　　図５　紙面制作

④　貼り合わせ　（図６）

切り絵及び紙面部分がずれないようにあらかじめ見当をつくらせておく。そして、表面用の和紙と切り絵部分をスプレーボンドでしっかり貼り合わておく。切り絵の文字を陸続きにしておくのはこのときの作業のためでもある。その上から、団扇骨を見当にあわせて置き、でんぷんのりを水でよく溶いたもの（流れない程度の濃度）を平刷毛で、その上からペタペタと軽くたたくようにして置かせる。塗るのではなく、たたくようにするのは、竹の繊維や和紙の繊維にしっかりとのりをくい込ませたいからである。この後、団扇骨だけを裏返しもう一度のりを置かせる。のりが乾かないうちに、その上から裏面用の和紙を見当に合わせ貼り、その上から厚みと幅のある刷毛で空気を追い出すようにしっかりとたたく。中に挟まれた切り絵のラインや団扇骨の繊維がエンボス状に浮かび上がるまでたたく。のりがしっかりついているかは、和紙の色が水気によって透明性を帯び濃くなることで確認させた。つきが不十分であれば、一度はがしのりを足した。その後、乾燥棚でしっかりと乾かす。

⑤　仕上げ

乾燥したものを団扇の形状に沿ってはさみで、団扇骨（あらかじめ長めになっている）ごと裁断する。最後に、「縁貼り、まめ貼り（団扇の糸が張ってある箇所を保護するため）」を施し、再び乾燥させて完成である。ちなみに、今回使用した竹骨は、「手作り団扇セット（定価３５０円）」として販売されているものを使用した。ちなみにこのセット、「大河ドラマ『篤姫』の中で小道具として使用されたものだ」と業者さんから聞いていたので、

生徒に紹介するととてもうれしそうであった。

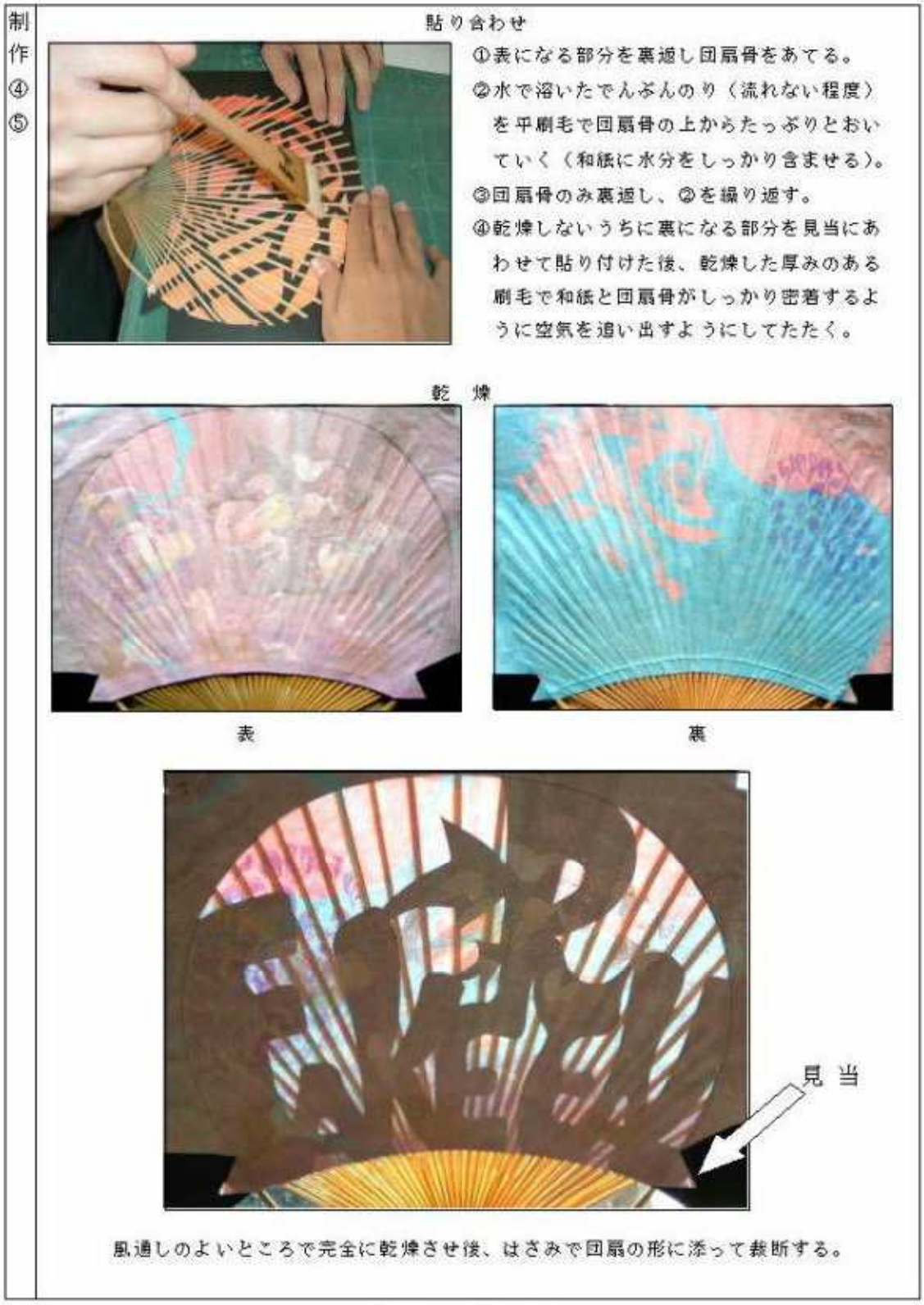


図６　貼り合わせ

４　授業のまとめ　　（図７）

完成した団扇について、キャプション（コトバやシラベに対する思いなどを記述したもの）を作成。美術教室の窓際に展示し、互いに鑑賞して感じ取ったことを付箋紙に記述して交換しあった。

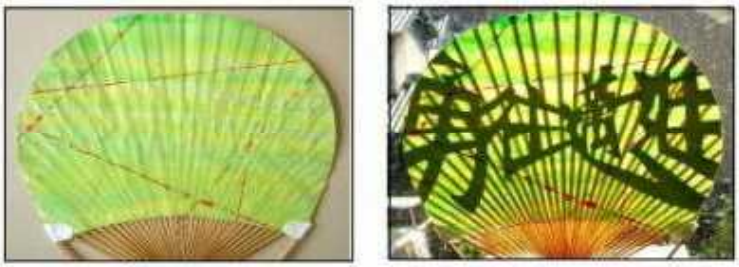
完成作品（光にかざす前と光にかざした後の様子）	作品のコメント
	文字の線をできる限りくっつけて縮ませるようにすることで「縁」を表現しました。まるで囲み模様も丸で統一して安定させました。字の線の太さを変化させて存在感を出しました。
	努力をしただけ報われるというのは僕があきらめそうになったときの希望のコトバです。力強くまぶしいコトバなので赤とオレンジで表現しました。
	コトバは「ポジティブに生きたいな」と思って選びました。交響楽「第九番第四楽章」ベートーベン作がそれっぽいので決めました。最後の部分がはじけるような感じだったので夜空に浮かぶ花火を表現しました。
	この言葉は一心不乱に進むという意味が込められている。その通りに行動したかったからこの言葉を選んだ。
	何ごとにも成功するには数多くの失敗を繰り返しその失敗を反省し失敗から学んだことを生かしていくことによりようやく成功のゴールに達するのだとわたしは信じている。なかなかうまくいかないことでも決してあきらめず努力していきたいと思う。

図７　　完成作品

Ⅴ　生徒の反応　（図８）

生徒たちの取り組みは大変意欲的なものであった。撫川団扇の鑑賞からはじまり主題の発想構想、制作へと続く中で、生徒たちのモチベーションはますます高くなっていった。特に、日頃美術に苦手意識を持っている生徒が、最後まで意欲的に取り組んでいた。「自己を見つめる」というテーマも創作意欲を高めることにつながったようだ。「今までに見たこともない」「今の自分にしかできない」ものが確実に形になっていくこと、自分の想像以上の作品の出来映えに満足や喜びの表情をうかべ、互いの団扇を見せ合いほめ合っていた姿がたいへん印象的であった。そして、生徒たちが地元の伝統工芸、和の『美』に対する理解や興味関心を高め、更に美術を学ぶ喜びや価値を感じている様子から、今後とも是非継続してやっていきたい題材の一つになった。

自分の出身地、地元の伝統工芸を学ぶことで美術に対する面白さを感じた。今回学習した撫川団扇がつくられている庭瀬というところは僕の家からけっこう近く、自分の家の近くにこんな全国でも有名な伝統工芸があるのが誇りに思え、とてもうれしかった。
今まで色やデザインなどいろいろな分野を学んできました。この撫川団扇制作はそういった意味で集大成のようなものではないでしょうか。先日撫川団扇の特集をテレビでやっていました。岡山の伝統工芸としてのこの団扇ですが、継ぐ人がおらず消えかかっているそうです。自分で作ってみてこその楽しみもあると思います。しかし、作るだけならロボットでもやろうと思えばできます。美術の本質はそこにあらず。作品を作ることによって自分の感性が、心がどのように変わるのか。そこが大事なところだと思います。
本物の撫川団扇を手にとって見たとき、蛍の絵だけでも「光って見えるんだ」と感動したのに、文字が書いてあるということを知って驚いた。それも岡山の工芸品。昔の人は風流だなと感じた。日本ならではの美しい工芸品だと思う。今は職人さんも減っていると思うけど、もっと多くの人に撫川団扇を知ってもらいたいし、日本の伝統としてずっと続いて欲しいと思った。
伝統工芸品の魅力を知り、「昔ながらのうつくしさ」という認識が深まった。すかしの技術も美しいと思ったし、俳句が詠まれている工夫は驚きと共に感心した。こういった細やかな工夫をすると言うことを私も取り入れたいと思った。また今回団扇ににについて学び、祖母がお気に入りの団扇をずっと使っているのをふと思い出し、「作品を大切に長く使おう」という意識が強まった。
岡山の伝統工芸を見て楽しむことをで、遙か昔の人とつながりができたようでおもしろかった。それに最近は伝統工芸を続けている人が減っているというふうに聞いたりもするので、少しでも伝統工芸に触れて知識を持ててよかったと思います。オリジナル団扇を作るのにけっこう時間がかかったので、撫川団扇を作るのに大変な時間を要すのだろうなあ、とあらためてプロの職人さんのすごさもよくわかりました。だから、美術を学ぶことは人の生き方を学ぶことになるのではないかと思うようになりました。
オリジナル団扇を制作して今までの自分を見つめ直す機会ができた。「自分にしか表現できない」ことって何だろう・・・と考えると今までのことを振り返ることができた。そして、美術のよいところはただ振り返るだけでなく作品を作って未来へとつなげていけるところだと思う。そう思うと美術を学ぶということは人生においてすごく大切なことだと考えるようになったし、関心も強くなり美術の時間が楽しみになった。
撫川団扇では光を透過させる和紙の特徴が生かされていた。このことから、何事もそのもの（素材）がもっているよさや魅力を最大限に生かすことが大切だと思うようになった。また、美術は自分を表す鏡だと思う。自分の個性や感性がそのまま作品に組み込まれていると思うのだ。私はそんな美術が大好きだし、これからも様々なことを美術を通して学んでいきたい。

図８　授業後の生徒の反応

Ⅵ　実践を振り返り

和紙には様々な種類があるが、教材研究の過程でこれらを十分試せなかったことが悔やまれる。今回使用した和紙は、墨流しなどに適した和紙（透光性、耐久性を満たしているもの）を選んだが、生徒たちの作品を見ると彩色技法に偏るものが多く、またマーブリングなど比較的簡単な技法に依存する傾向があり、テーマに基づいた表現の創意工夫において物足りなさを感じる作品もあった。和紙の特性を生かすという点では、ちぎり絵のような方法などを紹介してもよかった。仕上がりとしては満足している者が多かったが、自分が表したいテーマを表現技法を駆使して追究するには時間数の制限もあって十分とはいえなかった。

切り絵の部分においては、文字として読めるようにすることをあまり強調しなかったことや、団扇骨の線が太く（撫川団扇の骨の幅は２㎜弱）、切り絵の文字のラインが細いものは重なった際に見づらくなるなどの問題点もあった。

団扇の形状については、今回は皆一様の形状にさせてしまったが、団扇骨の長さに余裕があるので工夫させてもよかった。

指導計画について、夏休み前に完成させることができればよかった。完成したのは 10 月初頭である。時節にあった題材として位置づけることは、生徒の学習意欲を一層刺激するためにも重要である。

以上のことを踏まえ、次回の実践に生かすと共に、新たな題材探しを始めたいと考えている。

Ⅶ　授業化までに・・・

実は、夏休みに入るまで「貼り合わせ」の指導法については不安があった。切り絵部分と紙面をずれないように重ね貼り合わせるしっかりとした方法を見つけられたのは、多くの先生方のご協力（ある意味、犠牲）があってのことなのである。

夏の教育センター主催の実践講座で急遽、伝統工芸に関する授業実践を紹介することになり、この団扇づくりを先生方に体験して頂いた。「何とかなる」と腹をくくり臨んだが、予想以上に貼り合わせの段階で多くの問題点が出てきた。先生方からは「この方法だと生徒には難しすぎる」「こうした方がやりやすいでしょ」等々、多くの貴重なお知恵やアドバイスをいただくことになり、私の研修として、たいへん充実したものになった。あの夏の研修に参加くださった先生方には、あらためてお詫びすると共に心から感謝申し上げたい。

Ⅷ　再び保存会を訪れて　（図９）

校内展示だけでは何かもの足らず、保存会の方々にも是非ご覧いただきたく、作品を持って再び公民館を訪れた。

受講生の皆さんは一様に、中学生が作った団扇に感心しながら見ておられた。特に、細かい文字や細い線を表現しているものや色彩の個性的な扱いに感心しておられた　伝統工芸としての撫川団扇を制作している方々にとって作ることは、昔から伝わる伝統の型を再現していくことで、新しい発想や自分なりに大きく工夫を施すことはタブーとのこと。しかし、中学生向けに、伝統工芸に興味を持てるようアレンジされた授業を行うことには関

心と理解を示していただいた。今回、生徒作品をこのような形で還元することは、相互に得るものがあると実感した。受講生の方々が生徒作品を見ることで「自分たちの制作も負けていられない」とか「生徒たちの生き生きとした表現でこちらまで元気になる」等の意気込みを語っておられた。また、指導者側としては、より良い授業にしていくためのアドバイスをいただくことができた。

こうした出会いをきっかけに現在、市内の施設をお借りし、実物の「撫川団扇」とのコラボレーション展示会を計画中である。双方の活動を対比させることで、一般の方々にも、広く岡山の伝統工芸への興味関心を持っていただく場になること、また、生徒たちに「美術が自分と社会をつなぐ役割を果たすものになること」を実感させる機会になることを願っている。

図９　生徒作品を熱心に鑑賞される保存会の皆さん